続

病院で死ぬということ

For patients, nurses, doctors and all other people.

そして今、僕はホスピス

山崎章郎

聖ヨハネ会桜町病院ホスピス科部長

Fumio Yamazaki

続

病院で死ぬということ

そして今、僕はホスピスに

山崎章郎

主婦の友社

続・病院で死ぬということ

〈検印省略〉

平成5年7月30日　第1刷発行
平成5年10月10日　第4刷発行

著　者　山崎章郎

発行者　石川康彦

発行所　㈱株式会社　主婦の友社
東京都千代田区神田駿河台2-9　郵便番号101
振替　東京2-87527番
電話　(編集)03-3294-1121
(営業)03-3294-1134

印刷所　大日本印刷株式会社

©Fumio Yamazaki 1993 Printed in Japan
ISBN4-07-939639-2
〈日本複写権センター委託出版物〉
本書の全部または一部を無断で複写(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(☎03-3269-5784)にご連絡ください。

続・病院で死ぬということ

「真昼の月」の主人公である、故鈴木裕子さんをはじめ、
今は亡きすべての人々に捧げる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

はじめに

前著『病院で死ぬということ』が世に出たあと、実に多くの人々に読んでいただいた。心から感謝したい。また多くの人々からお手紙をいただいた。それらはほとんどが励ましの手紙であり、差し出し人は患者ご自身やご家族、看護婦や医師などの医療関係者、あるいは一般の学生や主婦、その他さまざまな職種や老若男女の読者であった。僕はそれら励ましの手紙には、多忙を理由にお返事を書くことができなかった。この場を借りて、一人一人のかたにお返事を書かなかった失礼をお詫びしたいと思う。同時にお礼も言いたい。

また、何通かの質問のお手紙や相談のお手紙もあったが、それらの幾つかには答えることができたけれども、他の幾つかには答えることができなかった。差し出し人の困難な状況はわかるのだが、どのように対応すればよいのかを考えているうちに日が経ち、また仕事に忙殺されてお返事のタイミングを失ってしまった。何人かのかたには深い失望を感じさせてしまったと思う。やはりこの場を借りてお許しを願いたい。

ところで、前著を出版してからすでに二年半が経過した。この間に日本の終末期医療の現状はどれだけ変化しただろうか。全国各地で終末期医療に取り組む医療関係者や市民の小さな組織が広がってきたり、ホスピスや緩和ケア病棟という末期ガン患者のための専門施設の数も、

わずかではあるが増加してきた。流れとしてはよい方向に向いていることは確かだ。

また患者の権利を守る運動や、一九九一年四月に起きた、いわゆる東海大学「安楽死」事件などを契機に日本尊厳死協会の入会者が増加するなど、一般の人々が必ず直面する死を、他人事や、あるいは病院におまかせしてしまう死としてではなく、自分のものとしてとらえようと考え始めてきていることも確かだ。

これらの動きをさまざまなメディアが一種流行のようにとり上げ、終末期医療やホスピスに関しての特集を組んだり、紹介記事を書いたりしている。

それらの表面的な動きだけを見ていると、ホスピスやホスピスケアがもうわが国に定着してきたかのような感じすらしてしまう。

だが冷静に見れば、それらが錯覚であることは一般の医療現場にいる人々にはすぐわかるだろう。一般病院でも、なんとか現状を変えようと終末期医療に取り組み始めている人の数はふえつつはあるが、従来の問題は、今も同じ問題としてありつづけている。

偽りの説明ともなしい希望にすがってさまざまな苦痛に耐えて闘病している患者たち、患者への無関心のため、とれるはずの痛みを放置している医師たち、忙しすぎる業務のために疲れ切っている看護婦たち。

一般病院現場での終末期医療の改善には、まだまだ時間がかかりそうな気がする。

そうであるならば、ホスピスやホスピスケアの具体的なあり方を少しでも多くの人に正しく

知ってもらい、医療サービスを受ける側の人たちが、みずからホスピスケアを望むことによって行政を動かし、医療内部からだけでなく、医療外部から終末期医療現場の改善を目ざすことが重要になる、と僕は考える。これから書き進めることが、そのような動きの一助になれば幸いである。

なお、今回も前著同様、事実をもとにした物語形式で書き進めている。

「娘よ」と「真昼の月」は、前任病院での体験をもとにしたものであり、後半は現ホスピスでの体験がもとである。

それぞれの物語が、現在闘病中の患者さんやご家族、あるいは医療関係者、さらにまた今後、同じような病気になるかもしれない人々のご参考、お力になれたら——と願っている。

また、僕はこの本の中で、僕が考えている「ホスピスの姿」を主張している。僕の主張は、自己主張もできない状況に置かれている弱い立場の患者さんやご家族にとっては、強すぎる部分があるかもしれない。

そのことは重々わかっているつもりだが、ホスピスや緩和ケア病棟が広がりつつある今こそ、きちんとしたホスピスの理念を定着させていかなければ、ゆがみの多い日本の医療を変えていくことはできないと、強く思うゆえなのだ。ご理解いただきたい。

はじめに 3
第1章 娘よ 9
第2章 真昼の月 29
第3章 再び僕自身のこと 67
第4章 そして今、僕はホスピスにいる 85
第5章 ホスピス棟の人々 123
1話 砂漠にそよぐ緑の大樹 124

2話　よみがえる歌声　136
3話　ゆだねられし命　146
4話　緑の木々の間から　161
5話　ホスピスはだれのために　168
6話　その道を通って　176
7話　酒とタバコとホスピスと　182
8話　母親の存在　192
9話　信じるということ　199
10話　最後の教壇　213
あとがき　227

装丁　亀海昌次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第1章

娘よ

不快な痛み

五月のある晴れた日曜日だった。その日の午後一時、彼の末娘の結婚披露宴が催された。きらびやかな会場の入り口で、彼は紋付きの羽織袴を身につけ、糟糠の妻とともに参会者に挨拶をしていた。彼の青白くこけた頬や車椅子のままの姿は、この華やかな祝宴にはふさわしくなかったかもしれない。しかし、参会者の多くは彼がなんらかの病気で闘病中であることを知っていたので、健康を気づかう声をかけながらも、これから始まる祝宴のほうに心が傾いているかのように皆、軽い足どりで会場に入っていった。

開宴の定刻が近づくころには、広い宴会場のテーブルは正装した参会者で埋まった。各テーブルからさざ波のように広がる話し声は広い会場のあちこちでぶつかり合い、大きなざわめきとなっていた。そのざわめきは司会者の開宴の宣言で一時中断した。開宴した最初のころは、司会者の司会で始まった仲人の挨拶や来賓の祝辞のたびにざわめきは消えたが、やがてそのざわめきが消えることはなくなった。

だれもが、この披露宴がどこにでもある結婚披露宴のように進み、そして終わっていくのだろうと考えていたに違いない。宴が進むにつれて酔いが回った人たちの声は大きくなり、だれかのスピーチは、そのスピーチの始まりと終わりにだけ拍手が起こり、スピーチの内容に関心を持つ人は、その話者の仲間ぐらいのものであった。

しかし、参会者の思いとはかかわりなく、いつの場合でも結婚式や披露宴は、結婚をした当事者である新郎新婦やその両家の親・兄弟姉妹たちにとっては特別な思いを抱く大事な儀式であることにまちがいはない。そして、そのことは今行われているこの結婚披露宴の当事者たちにとってはさらに深く特別な意味を持っていた。

彼が胃の不調を訴えて僕たちの病院の外来を訪れたのは、六十才までもうあとわずかなある年の春だった。胃の調子が悪いのは、それまで勤めていた会社を定年で辞めてから警備の仕事にかわり、夜勤が多くなったためだと彼は信じていた。「夜勤というものは自然の摂理に反しているから、胃の調子まで狂ってしまった。しかし、これも生きるためだ」と半ばあきらめ、思い出したように胃腸薬などを服用していたのだが、持続する不快な状態は彼を不安にさせ、病院へと向かわせたのだった。

彼は胃ガンだった。胃ガンであることは医療側から率直に伝えられた。彼がどのような思いでその事実を受け止めたかは定かではない。しかし、彼は医療側の説明に納得し、手術を受けることに同意した。

とりあえず手術は無事終了したといえるだろう。なぜとりあえずかと言えば、彼のガンはかなり進んでいたからで、目に見える病巣やその周囲のリンパ節はきれいに取り除くことができたのだが、ここまで進んでしまったガンはしばしば再発することがあるからだった。

手術後の経過は順調で、一カ月余りで退院した。その後は定期的な外来受診が彼の新たな仕事となった。手術を機会に、警備の仕事はやめることにした。生活は苦しくなるが、成人した三人娘のうち二人はすでに嫁いでいたし、末娘も仕事に就いていたので、なんとか暮らしていけるだろうと考えたからだ。

二週に一度の外来通院以外は、平凡でおだやかな日々がつづいた。すでに嫁いでいる娘たちはときおり孫たちを連れて訪問してくれたし、末娘にもどうやら恋人がいて結婚しそうな様子だった。彼は自分の日常と病気の治療に専念すればよかったのだ。

医者は手術は無事終了したと言ったが、ガンである以上、再発ということもありうるだろうと彼は考えていた。しかし、仮に再発したとしても、治療は医者にまかせるしかないのだ。じたばたしても仕方のないことだ。人生などなるようにしかならないのだ。今はとにかく、この平穏な日々に感謝しよう。彼は毎日、そういう気持ちで過ごしていた。

彼がみずおちと背中に異常を感じ始めたのは、手術後ちょうど一年目になろうとしている春だった。最初は重苦しい不快感から始まった。

やがて、それは徐々に痛みへと変化してきた。調子がよいときには悠然と構えていた彼もついに来たかと、さすがに動揺した。だが、日をおかずして動揺してもしようがないのだと思った。自分の体の中に起きている事実は、自分が動揺しても何も変わりはしないのだ。担当医によく診てもらって何が起きているのかを知り、そしてどうすればよいのかを判断していくこと

が最善なのだと気がついたからだ。

外来で痛みを訴える彼を、体のすみずみまで診察した外来の医師は、少し顔を曇らせながら入院して検査してみましょうと言った。外来の医師の表情の変化を彼は見のがさなかった。そして「きっと再発したのだ」と確信するようになった。入院後、彼の担当医には僕がなった。

入院後の幾つかの検査は、彼の確信を裏づけるだけだった。入院一週間後、僕は彼に「検査の結果、今回の症状に対して手術的治療はむずかしいことがわかりました。これからは薬を中心にして治療をつづけたいと考えています」と説明した。同時に、「今ある痛みは必ずなんとかできますので、それは心配しなくても大丈夫です」とつけ加えた。

僕の説明を受ける前からそのような事態を覚悟していた彼であったが、僕には平静を装っていた彼の顔が、彼の意思と関係なくこわばっていくのがわかった。だが彼は、僕が自信を持って、痛みだけはなんとかできますと言うと、ほっとしたような表情を見せてくれた。

僕は再発という言葉は使わなかったが、胃ガンの手術を受けたあとの自分自身の病状の変化をみてくれれば、素人の彼にも再発してきていること、病状が悪化してきていることは明らかだっただろう。

ともあれ彼は、医師が制ガン剤による化学療法をすすめてくれており、他に治療手段がないのなら、それに従ってみるしかないだろうと考えた。それに実際、約束どおり、痛みはとってくれた。彼の不安を増大させていた痛みがなくなると、彼はいささか居直り気味だった緊張し

た気持ちがさらに軽くなるのを感じた。これなら、今起きている事態はけっこうまい具合に解決するのではないか、とさえ思えてきたほどだった。彼は退院し、外来で投薬を受けることにした。

病状悪化

しかし、彼のおだやかな日常は三週間ほどで終了した。痛みが強くなってきたのだ。当初は鎮痛剤の増量で痛みは幾分か軽減したりもしたが、やがて外来だけではどうにもならなくなってしまった。そこで、疼痛コントロールの治療のために再入院することになった。

彼の気持ちは複雑だった。痛みが増強しているということは、ガンが成長していることであり、少なくとも化学療法の効果があまりなかったことを示しているからではないかと思えたからだ。再入院後、彼は意を決したようにその疑問を僕に尋ねてきた。僕は率直に、短い沈黙のあとに「そうかもしれません」と答えた。そして、もう少し強い薬を点滴で投与してみようと提案した。

治療の効果が上がっているかどうかを、医師たちは血液検査のデータやレントゲンやCT、超音波などの診断装置を駆使して判断することが多い。しかし患者たちは、もっと具体的なことを通してそれらを感じるものだ。たとえば、今まであった痛みがとれたり、落ちていた食欲が回復したり、体重が増加したり、そして何よりも、それまでよりも気分がよくなることで判

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.